

目 次

□ 英詩に現はれたる婦人の位置	齋藤 勇
□ 倭繪につきて (續き)	下村三四吉
□ 春日野にて	尾上柴舟
□ 龍雲山莊十小記	細田劍堂
□ 教育者たらんとする我等	
□ 旅行	
□ 和歌	
□ 消息	
□ 會計報告	
□ 會員諸君へ	

英詩に現はれたる婦人の位置

齋藤 勇

英詩に現はれたる婦人の地位。これは英詩に現はれた女性が男性に對して如何なる地位を有するかと云ふ問題である。

自分は女を解しない。又男をも知らない。人間といふものがわからない。即ち自分を知らないのである。我が魂をさへ知らない者が、婦人について話すやうに約束した事を悔いてゐる。

しかし、女も男も人である。故に女としてでなく、一個の人として、自分の思ふ事を述べよう。さうすれば、何か胸底に訴へる所があるかも知れない。今英詩にあらはれた婦人の詩を、大體年代に従つて話さうと思ふ。しかし一々委しく話す事は出来ないから、代表的詩人について點檢しよう。いづれの文明にも文學にも多大の背景がある。英國近世の文學にも亦背景がある。

中世紀の思想は近代に影響を残してゐるが、武士道の一特色である、婦人に對する尊敬、即ち、老若地位に關はらず、一人のレイデイに對し、結婚の如何に關はらず、ナイトが忠誠を捧げるといふギヤラントリの考へが、近代の思想に入り、文學にも多大の影響を與へた。今日英國では男女同權を殊更唱へる必要もなし又これに反對するものもないが、かうなるまでには、大なる歴史がある。

シエイクスピアは、英國や歐羅巴ばかりでなく、おそらく世界に於ける最大の作者だと思ふが、この人ですら、女子は男子におとると考へてゐた。